

[課程－2]

審査の結果の要旨

氏名 江口 のぞみ

本研究は、性別違和を有する当事者に対する性別違和の緩和を目的とする治療が、当事者の生活の質および精神的健康に与える影響を明らかにするために、複数の治療を受けている当事者を対象にした後ろ向きコホート研究を実施した。主要評価項目（主観的な生活の質：WHOQOL-26）と副次評価項目（抑うつ：CES-D）について、初診時と追跡調査時間の得点差から、ホルモン療法のみ群、手術（二次性徴）群、手術（一次性徴）群の3群間の効果量を算出した。主要な解析として、一般線形モデリングを適用し、データの欠測に対応するために制限付き最尤法を用いて推定値を算出した。その結果、以下のことが明らかとなった。

1. 心理的領域に関わる主観的な生活の質について、ホルモン療法のみを受けている当事者に比べて何らかの手術を受けている当事者の方が治療による改善の度合いが大きいことが明らかとなった。
2. 心理的領域に関わる主観的な生活の質について、二次性徴を変える手術を受けている当事者と一次性徴を変える手術を受けている当事者の間には治療による改善の度合いに有意な差はないことが明らかとなった。
3. 手術後1年以内の研究参加者を除いた当事者のみを対象に解析を行った結果、わずかに有意とならなかったものの、上記と同様の傾向が示された。
4. FtMのみの当事者を対象に解析を行った結果、わずかに有意とならなかったものの、上記と同様の傾向が示された。
5. 抑うつの程度については、治療による改善の度合いに有意な差はないことが明らかとなった。

以上、本論文は性別違和の治療としてホルモン療法のみを継続するより、自認するジェンダー・アイデンティティに移行する身体的変化が大きい何らかの手術を受ける方が当事者の心理的領域に関する主観的な生活の質をより高くする可能性を明らかにした。本研究は、性別違和を有する当事者を初診時から長期間にわたって追跡することで、性別違和の治療効果を治療内容毎に比較した数少ない研究であり、日本の治療環境において、当事者が多様な選択肢の中からジェンダー・アイデンティティに見合った治療を選択する際に、エビデンスとして重要な貢献をなすと考えられる。

よって本論文は博士（保健学）の学位請求論文として合格と認められる。